

# 大津 歴博 だより

平成22年度  
新収蔵品の紹介

2011  
No.83



2 柴田晩葉 巡礼者御一行



1 大津絵 長刀弁慶



大津市歴史博物館

## 購入

- 1 大津絵 長刀弁慶 一幅 江戸時代(一七世紀)  
大津絵の長刀弁慶の初期作。一七世紀に遡る。一八世紀中葉の作とは、体の向きや長刀を持つ腕、甲冑の描写などが異なる。その姿は、最後まで義経を守って立ち往生した様と言われ、慈悲の心の大切さを諭す教訓的画題とされる。表具裂は柳宗悦の仕立てによる丹波木綿。軸首はバーナード・リーチ。
- 2 柴田晩葉 巡礼者御一行 一幅 大正時代  
振り分け荷物に洋傘を差した身なりの団体さんが観音霊場札所の境内を歩く。当時、地方から都会の名所巡りをしていた、おのほりさん御一行は、仲間がはぐれないように「赤ゲット」と呼ばれる毛布を身にまとうっていた。3 柴田晩葉 俳画しぐれ傘 一幅 昭和時代(戦前)  
師の山元春拳は狂歌師好き、そして晩葉は俳句好きで、当時の「滋賀県人物史」でも紹介された。本作は逢坂の関を詠んだ屈託のない俳味で軽妙に季節感を表現している。「しぐる、や 人馬かけゆく 関の趾」
- 4 歌川広重 東海道五十三次のうち大津(隷書東海道) 江戸時代(一九世紀)  
題箋の書体により「隷書東海道」と通称される東海道揃物。「東海道名所図会」の挿絵「大津絵の店」を反転・引用しているが、品定めをする買い物客や、お喋り好きの女性、喧嘩っ早い人足など、広重のアレンジが楽しい。
- 5 歌川広重 東海道五十三次のうち大津(行書東海道) 江戸時代(一九世紀)  
こちらは「行書東海道」。石場の港にあった茶店を描く。「名物 源五郎餅」の看板が大きく目立ち、当時から琵琶湖名物であったことが分かる。
- 6 歌川広重 東海道五十三次のうち大津(狂歌入り東海道) 江戸時代(一九世紀)  
狂歌が添えられているバージョンの東海道揃物。やはり石場の港を描く。狂歌は「君が代のたからを積みて門出の 仕合よしといさむうしかひ」
- 7 三代歌川豊国・二代歌川広重 観音霊験記のうち岩間寺・石山寺・三井寺 幕末  
観音霊場にまつわるエピソードを三代豊国が、境内名所絵を二代広重が描いたシリーズ。岩間寺における松尾芭蕉、石山寺の良弁、三井寺に毎日かさず観音参りをした杉女の各エピソードが描かれる。

## 受贈

- 1 瀬田国民学校絵日記 一揃 昭和時代(戦前) 西川馨氏寄贈  
同校五年智組の児童が描いた絵日記。担任の西川綾子先生の指導によるもので、晴れやかな入学式の絵の一方で、勤労動員や防空訓練など、戦時下の厳しい生活ぶりが、純粋な子供たちの目を通して描かれている。
- 2 寺内北南西各町及び真町絵図写 一鋪 大西淳氏寄贈  
明治一五、一六年頃(一八八二、八三)に制作された寺内周辺(現、長等一丁目付近)の絵図面を、昭和三四年に筆写したもの。この付近は都市計画道路により風景が一変しており、絵図によって明治期の風景を復原できる。
- 3 昭憲皇后行啓次第第書 一冊 明治九年(一八七六) 上野孝司氏寄贈  
昭憲皇后が、皇居から京都御所へ行啓した際の記録。当時は東海道線がまだ一部しか開通しておらず、皇后は輿に乗って移動した。この記録には、大津宿や鳥居川、大谷町での休憩場所や日程などが詳しく記されている。
- 4 西光寺獅子口 両脚部付き 一式 安政六年(一八五九) 西光寺寄贈  
現平野一丁目(上田上平野)の西光寺本堂大棟にあった獅子口。安政の年号とともに、青地村(現草津市)の瓦師が作ったことも刻まれている。
- 5 大正・昭和期記念写真 大正・昭和時代 六葉 宇野功氏寄贈  
大津西尋常小学校(現長等小学校)や大津尋常高等小学校(現中央小学校)の卒業記念写真など。学生服はわずかで、ほとんどの児童が着物姿である。
- 6 戦時雑叢各種 昭和時代(戦前) 五片 宇野功氏寄贈  
舞鶴において兵役にいた人物が使用していた肩掛け鞆やリュックサックなど。鞆のラベルに「舞鶴軍需部」「昭和十九年」などの文字が見える。
- 7 8ミリ映写機 昭和時代(昭和五〇年代) 一台 堤節夫氏寄贈  
チノンサウンド9000。この映写機のように、昭和五〇年代の資料もいまや貴重になっており、展示等に活用できる歴史資料となっている。
- 8 蚊帳 昭和時代 一張 昭和時代(戦前) 堤節夫氏寄贈  
取り付けられたタグに「桜印(サクラ印)」と記されており、近江蚊帳であると考えられる。寄贈者が五〇年程以前に購入したもの。

## 歴博の新収蔵品紹介(平成二二年度分)

当館では、平成二年の開館に先立ち、昭和六〇年から、購入・受贈などの方法によって館蔵資料の充実化を図ってきました。昨年度収蔵資料の分野は、絵画・古文書・歴史・写真・機器資料と多岐にわたりますが、いずれも大津の歴史と文化を語るうえで、たいへん貴重な資料といえます。本市のさまざまな姿に触れていただくとともに、皆様方のご家庭に残されている資料があれば、ぜひとも当歴史博物館に情報をお寄せください。なお、貴重な資料を当館にご提供いただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

### 受贈資料



3 昭憲皇后行啓次第書



4 西光寺獅子口



5 大正・昭和期記念写真 大津尋常高等小学校卒業写真



1 瀬田国民学校絵日記



8 蚊帳



2 寺内北南西各町及び真町絵図写

## 第九〇回三二企画展

# 大津事件と津田三蔵

■四月二六日(火)～五月二九日(日)

明治二四年(一八九二)五月一日、来日中のロシア皇太子ニコライが大津遊覧中、沿道を警備していた巡查津田三蔵に斬りつけられました。これが、後に日本全体を揺るがすことになる大津事件の発端でした。本年は、事件発生二〇周年にあたることから、事件関係の様々な資料を展示します。

まず、津田三蔵が犯行に使用したサーベル。このサーベルは、日本刀を仕立てなおしたもので、先端近くには刃こぼれも残り、ニコライの血染めのハンカチとともに、生々しい事件の様子を雄弁に語ってくれます。また、現場の見取り図や関係者の訊問記録を含め、滋賀県指定文化財として保存されています。また、津田三蔵の手紙は達筆で、言葉使いも巧みであり、教養の深さが見てとれるものです。その他、ニコライは現場で応急手当を受けま



大津事件関係資料 滋賀県指定文化財  
滋賀県立琵琶湖文化館蔵

すが、その場所となった永井家に残された名刺帳には、事件後に同家を訪問したロシア士官や青木周蔵外務大臣、ニコライを助けて勲章と褒賞金が下付された人力車夫などの名刺が残されています。また最高裁判所に保存されている大審院判決書の写しなど、一級の関係資料によって、大津事件の全体像に迫ります。

## 第九一回三二企画展

# 横井金谷―奇僧が描いた文人画の世界―

■五月三一日(火)～七月一〇日(日)

江戸時代中期の文人画の大家、与謝蕪村に私淑して、蕪村風の山水画を多く残した画僧、横井金谷(一七六一―一八三三)は、画人・僧侶以上に奇人でもありました。世事にしづられず気の赴くままに諸国を遊歴しては、滞在先で作品を残しました。シーボルトの弟子で、日本の近代植物学の泰斗、伊藤圭介(一八〇二―一九〇二)が、父親と親しかった金谷の様子を語っているのですが、それによると、名古屋の自宅に金谷が時々来訪すると、近所の人々が話を聞きに寄り集まり、金谷もそれに応え、「劇談雄弁常に海内の奇を吐き、満座を喫驚せしめ」たようです。さぞかし、全国津々浦々の興味深い話をおもしろおかしく語る金谷の話術に、人々は驚きや興奮の声をあげていたのでしょう。しかし、ひとたび作品を描けば、金谷は、奔放に筆を走らせて激しい風雲の中に聳える山水を描き、または静寂さをたたえた溪谷を手がける人物でした。一方で、マンガチックな略筆で、当時の市井の風俗や人物を描いており、好奇心の旺盛ぶりも作画に発揮しています。

本展では、大津ゆかりの個性あふれる金谷の生誕二五〇年を記念して、三〇点前後の作品を展観します。魅力的な作品の数々を楽しんでください。



横井金谷 蜀栈道図 本館蔵



さそりイラスト



方形軒瓦 近江神宮蔵



横から見た蓮の花



真上から見た蓮の花

南滋賀廃寺から出土する軒瓦のなかに、「さそり（サソリ）瓦」というニツクネームを持つ軒瓦があります。軒丸瓦のデザインは、一般的には蓮の花を真上から見たものですが、この軒瓦の文様は蓮の花を横から見たものです。また、その形態も通常の軒丸瓦ではなく、全国的に見て極めてめずらしい方形をしています。このことから、この瓦の正式名称は「蓮華文方形軒瓦」、あるいは「側視形蓮華文方形軒瓦」、「側面蓮華文方形軒瓦」などといえます。それでは、いつ頃から「さそり（サソリ）瓦」と呼ばれるようになったのでしょうか。

昭和三年に南滋賀廃寺の発掘調査を実施した肥後和男氏は、昭和四年に発刊された『滋賀県史蹟調査報告第二冊』の中でこの瓦のことを取り上げています。肥後氏は、この瓦を鬼瓦と考え、その文様について「蜘蛛とも蠍とも見える動物の姿を倒しに描いて見る人に少しく不気味の感じを与えるものである」と記しています。肥後氏はこの瓦の文様から、さそりが尻尾を逆立てて、相手を威嚇している姿を連想したのでしょうか。また、昭和六年に発刊された『滋賀県史蹟調査報告第三冊』では、肥後氏は鬼瓦説を訂正し、「蠍模様方形疏瓦」との名称を使用しています。ここでいう疏瓦（つつみがわら）とは、軒丸瓦のことであるとみられます。そして、方形疏瓦の文様については、蓮華の変化したものと認めつつも、下端の頭に当たる部分が二つに割れていることと、弁の先端が爪形をしている点から、「この原型を作った人は明らかに蠍風の動物を意識していた」と推測しました。肥後氏は「蠍」説をあきらめ切れなかったのでしょうか。この肥後氏の見解から、「さそり（サソリ）瓦」の名称が生まれたようで、その後、「俗称サソリ文瓦」、「いわゆるサソリ文瓦」、「通称サソリ文瓦」などの用語が使われるようになります。

ただしここで、注意しなければならないことがあります。「さそり（サソリ）」に「文」を付けて「さそり（サソリ）文瓦」とすると、さそりの文様を持った瓦という意味になります。この用語は誤りであり、ニツクネームで呼ぶときは、あくまで「さそり（サソリ）瓦」とすべきでしょう。（青山 均）



4 歌川広重 東海道五十三次のうち大津 (隷書東海道)



5 歌川広重 東海道五十三次のうち大津 (行書東海道)



6 歌川広重 東海道五十三次のうち大津 (狂歌入り東海道)



3 柴田晩葉 俳画しぐれ傘



7 観音靈驗記のうち三井寺



7 観音靈驗記のうち石山寺



7 観音靈驗記のうち岩間寺

大津歴博だより No.83  
平成23年4月26日

大津市歴史博物館  
〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎ (077) 521-2100  
ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>